

月影



第64号

徳香流布

とっこうるふ



令和元年六月十日発行
浄土宗西山禅林寺派
常林院

良い香りは

人を明るく

穏やかにする

徳のある人は

人を清らかに

正しい方へと導く

徳の香りは

風に流されず

周りの人たちに

静かに

広がっていく

開宗八五〇年 法然上人の生涯



誕生

混乱の世

宗祖法然上人は、一一七五年に浄土宗を開かれました。五年後の令和六年（二〇二四年）には、浄土宗を開かれて八五〇年を迎えます。

開宗八五〇年という大きな節目を迎えるにあたって、法然上人の生涯を改めてたどっていくことで、今日まで八五〇年もの長い間、脈々と受け継がれてきた上人の教えに触れていきたいと思えます。



平安時代末期。貴族が治める世から、武士が治める世へ、権力闘争によって大きく変化する混乱の時代が始まりました。

法然上人誕生

一一三三年の四月七日。現在の岡山県久米郡久米南町に住む、父、漆間時国（うるまときくに）と母、秦氏（はたうじ）の間に、法然上人は誕生されました。

勢至菩薩のように智慧のある子に育ってほしい

と、勢至丸（せいしまる）と名づけられました。

伝説

夫婦は長い間、子宝に恵まれませんでしたが、ある夜、母、秦氏が剃刀（かみそり）をのむ夢を見て、ご懐妊されたと伝えられています。

剃刀は僧侶になる時、頭を剃るために使う道具であることから、父、時国は生まれてくる子が将来僧侶になることを予言していたと言われています。

また、誕生された時。どこからともなく二流れの白い幡（はた）が飛んできて、漆間家の庭の棕の木のごずえに舞い降り、美しい

調べを響かせながら七日間とどまったあと飛び去ったという話が残されています。

両幡（ふたはた）の天降ります棕の木は世々に朽ちせぬ法の師の跡

熊谷直実

誕生寺

現在、法然上人がお生まれになった住居は誕生寺というお寺が建立されています。法然上人の弟子の熊谷直実が、上人が彫った仏像を託され、両親の墓前を弔うように命ぜられたことが誕生寺建立のきっかけになりました。

つづく

永観堂だより

御忌会

総本山永観堂禅林寺において、今年も四月二十二日から二十五日まで、法然上人の御命日の法要「御忌会」が勤められました。

四日間、晴天に恵まれ、暑い日もありましたが、たくさんさんの参詣者がお参りされる中、最終日の満座を迎えました。

今年も、初日に始経師（しきしょうし）という役に任命されました。始経師とは、法要中、お経を言い出す役目です。

雅楽が流れる中、内陣の中央へ進み、管長様の前に



御忌会

ある礼盤（らいばん）という台に、決められた作法をして座り読経を始めます。法要が終わって、大役を無事に務めることができて安堵しました。

我が宗派では、五年後、開宗八五〇年を迎えます。法然上人が浄土宗を開かれて八五〇年の記念の年です。本山の準備委員会も動き出しました。

彩寺記

お盆の準備

毎年、五月頃になると、お盆に向けて、色々な準備が始めます。その一つが、檀家の皆様にお渡しする水塔婆を用意することです。過去帳を見ながら、各家のご先祖様の戒名を水塔婆に書いていきます。

八月になると、檀家の皆さんが水塔婆を取りに来られます。水塔婆は一度ご自宅に持ち帰ってお仏壇に供えられ、ご先祖様をお迎えされます。

そして、八月十六日の盆施餓鬼（ぼんせがき）の法要で、水塔婆回向をするために、再び水塔婆をお寺に預けに来られるのです。



水塔婆



仏教歳時記



ぼだいじゅ
菩提樹の花さしのぞく
写経台

しぎょうだい

金子篤子

菩提樹は仏教と深い関わりのある樹です。

その昔、お釈迦さまが、菩提樹の下で悟りを開いたと伝えられています。

樹は十メートル以上にもなり、六月頃に淡い黄褐色の小さな花を咲かせ、秋には球形の黒い実をつけます。

種子は、数珠の原料にも使われています。



雑記抄

〜一日一生〜

「一日一生」という言葉があります。一日を一生と考えるのです▼朝、目が覚めた時が、この世に誕生した時。そして、夜眠る時、命が終わり、一生が終わる時。次の日の朝、また新しい自分に生まれ変わる▼今日、起こった良いことも悪いことも、すべてその日で終わると考え、次の日の朝、新しい自分に生まれ変わる。そうやって朝が来るたびに、新しい自分に生まれ変わり、新しい一生が始まるのだと思って過ごすのです▼考えてみると、一生というのは、一日一日が積み重なってできています。

一日一日を大切に過ごすことは、一生を大切に過ごすことにつながっていくのです▼漢字の「朝」をよく見てみると、四つの漢字が隠れています。「月」、「日」、そして「十」が二つ。これを並び変えると、「十月十日（とつきとおか）」になります。「十月十日」とは、赤ちゃんがこの世に誕生するまでの間、お母さんのおなかの中で過ごす月日のことですよ▼毎日迎える朝を、いつもと変わらない平凡な朝と思わず、十月十日を経て、この世に誕生した朝なのだと思うことで、見るもの聞くものが、いつもより新鮮に感じるかもしれません。